

先日、三日の間に四つの葬式（一つは葬式をしない人の、日を置いてからの偲ぶ会だったが）に出た。七十代ひとり、あとは六十代である。誰もが長生きするようにいうけれど、死ぬ人も多い。あっけないように同年輩が死ぬ。私もいつやられるかも分からない。そういう感じがなまなましい。

これが七十代まで生きのびると、またちがうのだろう。もっと落ち着くのだろう。

いまはまだ、意外なほど側に来ている死神と、おだやかに向き合えない。気配を感じると過度に反応して、なにをしてももう無意味だというような感傷に落ち込む。いや、感傷ではなく、事実もうなにをしても無意味かもしれないのだから、**五十代の感傷とは随分ちがう**。

六十代に入って私は何度か町なかで立往生することがあった。

突然、ズシリと重い疲労に襲われる。歩けなくなる。

それでもあと少し歩けば喫茶店があるというのであれば歩けないことはない。しかし、なにもない道がある。右側は長く学校の塀で、左側は工場だとか住宅ばかりが続いていて、相当歩かないと腰をおろすところがないとか。

そんなところをどうして歩いているのかというと、歩くのが好きなのである。自覚的には特に悪いところもない。子供のころから入院したことがない。元気である。元気なつもりで、ついある駅でおりて次の駅まで歩いてみようとか、それも少し紆余曲折してみようとか思う。そして途中の小さなコーヒー店に入って、行き詰った仕事の先行きをあれこれ考えているというのも嫌いではない。**五十代もやって来たことだ**。

ところが、不意に歩けなくなるのである。

・・・こんな話を讀むと、60代になる前になすべきことをやっておかなければ、という切迫感を感じる。人生は短い…。

「ダブルフェイス」の風景 久間十義 155

ところで円山町を「三業地」と書いて思い出したが、いまこの言葉を聞いても、少なくとも四、五十歳くらいまでの人間はピンとこない。ひどいときは「産業地」の誤りではないか、と思うかもしれない。芸者屋と料理屋、待ち合い。これが三業で、この三種の営業地が三業地。要するに花街である。

—なんて、偉そうに書くが、実は恥ずかしいことに私もよくは知らなかった。数年前から早稲田大学の文学部で学生諸君といっしょに小説を讀む講座を持っていて、**今年のテーマは情痴小説**。必然的にその種の場所についての言及が多くなって、学生諸君の前ではあたかも見てきたように喋っている自分に気づいて、ハツとする。

・・・講座のテーマが情痴小説かあ。

ダンフミは何になりたいか 檀 ふみ

自分には向かないと思っていた女優だが、よく考えてみれば、こんなに向いている仕事もない。「女優は待つのがショーバイ」と言われるが、私はノホホンとした性格、平たく言えばノロマである。「待つ」のがちっとも苦ではない。「女優はアレコレ気を回さず、泰然としていたほうがいいの」とも言われるが、私は「泰然たること富士山のごとし」である。**暑さ寒さに強い。どこでも眠れる。頑丈である。汗をあまりかかない。トイレが遠い。声大きい。目が近い。**

演技力さえ云々しなければ、ほとんど女優の要件を満たしているではないか。

そのことに思い当たって以来、「女優になりたい」というのが私の夢になった。それも、ぜひ「いい女優」になりたい。

・・・こういう自己PRを出来る人は羨ましい。自分にはできない厚顔モードに憧れる。

以上が、昨年四月から今年四月にかけて、フジテレビ系列で放映されたテレビシリーズ『Vガンダム』のプロット。自分の仕事は、一年間にわたって**放映されるドラマを編集し、小説に焼き直す**というものだった。

もともと「頭に浮かんでくる映像」を文章化する作業を続けていたのだ。人の作った映像を文章化するのも同じことだと思い、深く考えもせずに引き受けてしまった。長大なドラマを構成し直し、感覚的に言うなら一本の映画にまとめ上げる作業はぜひやってみたかったし、今後の勉強にもなるだろうとも思えた。放映開始前は、まだ終盤のストーリーが出来上がっていなかったのだから、後半はオリジナルでやらせてもらう了解も取りつけて、書き下ろしよりはちよっぴり**気楽な気分で書き始めた**のだった。

ところが。書くことがこれほど辛く、試行錯誤のくり返しになったためしはなかった。文章にすべき映像はすでにあり、その通り著しているにもかかわらず、なにかがいつもと違う。いくら書いても上滑りの感覚が拭えず、いったいどうしたわけだとさんざん悩んだ挙句、**行間から立ち昇ってくるものが希薄**なのだという事実につき当たった。序章を書き終えたところで気づいたのだが、登場人物の心理描写も、風景の点描も、すべて**状況説明の羅列**でしかなかったのだ。

最初は、自分自身が登場人物の生理に慣れていないからだろうと考えた。なにせ他人が作り出したキャラクターだから、自分の生理と一致しないのは当然。書いているうちにこなれてくるはずと高をくくっていたのだが、一章を終えた時点でそれも違うらしいとわかってきた。他人の物は、どこまでいっても他人の物。一から自分自身で生み出した物でない限り、小説に生命が宿ることはない、百年遅い自覚に立ち返らされたのだ。

結果、自分はテレビシリーズの映像を忘れるように努めた。頭の中で小説用の映像を練り直し、序章は導入部分の変更を含めてほぼ全面改稿。一章もゲラの段階で徹底的に赤を入れ、版元には多大な迷惑をかけてしまったが、我慢すればどうにか読み返せるレベルには引き上げることができた……と思う。過渡期の二章はところどころつかえる部分が見え隠れするが、三章あたりから完全にふっきれて、下巻はいつものペースで書き進められるようになった。お陰でテレビシリーズからは完全に逸脱し、出だしと基本設定だけが同じの、**ほとんど完全書き下ろし作品を書く羽目になった**とはいえ、やってよかった仕事だと今はつくづく実感している。

- ・・・「状況説明の羅列」でいい場合もあるが、娯楽では許されない。厳しさを感ずる。